

第68回愛知県公立大学法人評価委員会会議録

1 日 時

令和7年1月23日（木）午前9時30分から午前11時15分まで

2 場 所

愛知県庁本庁舎 6階 正庁

3 出席者

委員 4人

説明のために出席した者 14人

4 傍聴者

0名

5 議 題

（1）委員長選任について

（2）委員長職務代理者の指名について

（3）愛知県公立大学法人第四期中期計画に関する意見について

（4）愛知県公立大学法人の第三期中期目標期間の業務実績評価実施要領について

6 議事概要

【委員長選任について】

- 委員の互選により、前田委員が委員長に選任された。

【委員長職務代理者の指名について】

- 河辺委員が委員長職務代理者に指名された。

【愛知県公立大学法人第四期中期計画に関する意見について】

- 第四期中期計画に関する意見を聴取した。

【愛知県公立大学法人の第三期中期目標期間の業務実績評価実施要領について】

- 原案について「意見なし」とした。

【質疑】

(1) 委員長選任について

○ 事務局

まず、議題1の「委員長の選任」について、委員長の選出は、「愛知県公立大学法人評価委員会条例」第4条の規定に基づき、委員の互選により定めることとなっております。事務局から事前に委員の皆様にお伺いしましたところ、本日御欠席ではありますが、前田委員に委員長をお願いしたらどうかとの御意見をいただいておりますが、いかがでしょうか。

(異議なし)

○ 事務局

御異論もないようですので、前田委員に委員長をお願いすることといたします。

(2) 委員長職務代理者の指名について

○ 事務局

議題2「委員長職務代理者の指名」についてですが、条例第4条第3項の規定により、あらかじめ委員長職務代理者を指名することとされております。河辺委員にお願いしたいと存じますが、いかがでしょうか。

(異議なし)

○ 事務局

では、河辺委員、よろしくお願いいたします。

(3) 愛知県公立大学法人第四期中期計画に関する意見について

○ 委員

議題3「愛知県公立大学法人第四期中期計画に関する意見について」に移ります。資料1及び2について、法人から説明をお願いします。

(資料説明)

○ 委員

ご説明ありがとうございました。それでは、この愛知県公立大学法人第四期中

期計画につきまして、何かご意見はございますか。

○ 委員

外部資金の獲得について、研究のところに記載されておりますが、現状どのような水準にあるのでしょうか。

○ 県立大学

正確な数字を申し上げることは出来ませんが、第三期中期計画でも、外部資金を獲得するという計画は立てられていたのですが、数値目標というところでは、目標になかなか届かなかったです。外部資金獲得の戦略をこれから練り直していかないといけないと思っています。外部資金の獲得を増やす方針を挙げているのですが、外部資金にも種類があります。メインは科研費です。こういうものを獲得に繋げていくためには、共同研究がとても重要になります。これから連携を深めていく芸術大学や海外機関と、特徴を活かした共同研究を考えていくことになっていきますが、第三期の現時点で言いますと、目標には少し届かない結果になってしまいます。状況としては、そういったところです。

○ 委員

大型の研究費に関しては、文理融合的なものや学際的な研究が求められてきているという現状があると思います。ただ、なかなかそういった垣根を超えて、一緒に何かをやるというのは、まだまだハードルが高いと思っておりますが、いかがでしょうか。

○ 県立大学

おっしゃるとおり、特に日本では縦割りが強い傾向にあります。これから大規模なものを考える時には、学際的、文理横断的なものというのは意識しなければなりません。これも言われてから久しいのですが、なかなかその実現ができないというのがあります。ただ、言及してくださったように、教育のところの1つ目で、学士課程、つまり大学4年間の方で、文理融合領域の設置というのがあります。これは文部科学省の機能強化支援事業に採択されているものがあります。2つ目が、複数の研究機関で、これは大学院の話です。3つ目が芸術大学との教育連携で、教育のところでのこの3つがキーワードとしてあるのですが、これから芸術大学との連携を深めることによって、人文社会の間でも、その芸術的な要素というのを入れることによって、少しでも、そのような研究に繋がっていくと考えています。最初からこの研究課題を出すからと言って、よく知りもしない人を集めても、なかなかうまくいきません。せっかく我々

兄弟校として存在するわけですから、今年度、特にそれぞれを知るという機会について、芸大学長と一緒に設けるようにしているところです。なので、そういうところから、他領域の教員が、いろんな形で交わって、そこから教育研究が生み出されていくことを期待しています。具体的な例を申し上げますと、芸術大学の陶磁をやっておられる先生がおりまして、その方はサマルカンドの陶磁器の塗料の研究などをされておられます。今年度から、県立大学にウズベキスタン出身の先生が着任されました。その方は、イスラムの女性についての研究をされています。そういう先生たちを引き合わせると、それぞれの領域は全然違いますが、やはり盛り上がりました。そういうような、手探りですけども、お互いを知った上で研究課題を発掘・構想していくというような形をとっていかれたらと思います。芸術大学との連携によって裾野は広がることになりますし、文理融合の試みについても、看護、情報科学といったところと、大学の方針として手を結びながら、学部や大学院というところでかけ合わせていくことで、学部ごとにしか存在しなかった意識が横に広がっていくところを活用して、少しでも外部資金を獲得していけるといいなと思います。まずは、その外部資金、多様な研究課題が、外部資金獲得の申請に行くようなことを目指したいなと思っております。

○ 委員

もう1点だけよろしいでしょうか。DXの推進についてですが、情報科学部をお持ちですので、その強みを活かした取組を進めていくということだと思いますが、DXについては、グリーントランスフォーメーション、つまり気候変動とどう両立させていくかというのが重要になってきます。要するに、DXが、気候変動に対してかける負荷について、指摘をされているところです。大学を含めて、全ての企業・組織に気候変動対策をとることへのプレッシャーというのが非常に高まってきていると思います。DXを推進されるということと、グリーントランスフォーメーションに目配りをされるということの両立といった点では、何かお考えでしょうか。

○ 大学法人

DXと掲げておりますが、実は、私ども非常にまだまだ紙文化というところがございます。ですので、まずは足元のところをということで、業務をしっかりと検証しまして、続けるところとやめるところをしっかりと確認して、それによって環境への負荷を減らすというところは考えております。その上で業務ワークフローをしっかりと見直しをさせていただき、人がやる部分と機械に任せる部分をしっかりと確認した上で、取組を進めていくということを考えております。

足元の取組というところで、ご説明させていただきました。よろしくお願いいたします。

○ 大学法人

私は実は企業から来ていますので、企業から来た目で見ますと、D X化・デジタル化は大変遅れていると思います。ただ、今ある色々なものをD Xに置き換えれば解決するということではないので、まずは業務改善を進めております。その上で置き換えられるものは進めていく。そういうステップで進めております。

○ 委員

今回は、これから6年かけて、ゴールを決めて、戦略的にこれらを遂行していくということなので、これからの計画で具体的な数字が出てくるというふうに認識しております。文理融合だけではなくて、芸術とも一緒に連携していくということが1つ。また、少し弱かったなという海外・国際的な取組が盛り込まれているということと、あとは最も大きいのは、産業界や地域と連携することによって、外部からお金が入ることです。そういったところも、これからもう少し積極的にやられていくと私は期待しておりますので、大体盛り込まれていると思います。これから具体的な取組を進めていくと思いますので、しっかりと進めていただければと思います。

○ 委員

これは特にご回答いただく必要がないということで、委員からのご意見でございました。お聞きとめいただければ幸いに存じます。

私からも、一言申し上げたいと存じます。外部資金の問題とも関連をするのですが、県立大学におかれましては「県大世界あいち学」、これを第三期の中で発足させて、新しい科目を次々に作って、推進をされてきました。しかも、外部資金を獲得することもできました。これは、一般教養として展開をされているものと承知しておりますが、私はすばらしいことと考えております。先ほどの科研費のような問題となりますと、先端研究になりがちですけれども、そこにとどまらず、すべての学生が触れるもので、県立大学としての特色がある科目群を作っていく。これは、県立大学、公立大学のあり方が、今日本中で問われておりますが、そのような中で、重要な試みではないかと思います。ついては、67回、66回の評価委員会のときにも申したのですが、この第四期において、さらに、これを発展させることについては、いかがでございでしょうか。触れられていないわけではないのですが、この概要のところでは、大きく示されなかったものから、まだこれからのこととは存じますけれども、お考えのことがありましたら、

一言伺えればと存じます。

○ 県立大学

今言及いただきました「県大世界あいち学」については、第三期の最大の目玉でした。これは、三菱未来育成財団から外部資金をいただいて、大変ありがたかったです。ここでは、「多文化社会への招待」と「データサイエンスへの招待」という2つの授業を1年生が全員受講するというものでした。従って、5学部の文理の教員が協力して授業を作るという、これを大きな特徴としていました。実は、第四期において文理・領域横断というふうに掲げていますものも、新たな学部レベルのものを作っていきこうという1つの発展系になります。教養教育としての、「県大世界あいち学」はどうなるのかというと、消えずにこれからも発展させるのですが、改善、発展させていくという意味では、概要資料に出ていないのですが、例えばどういうことが入ってくるかというと、アントレプレナーシップ教育です。インキュベーション施設との関わりで、この教養教育を担当しているセンター長が一生懸命考案しています。それから、何度か出てきています芸術大学との連携による科目をどのように設定していくのかという事務的な細かいことも含めて、両大学で検討しているというところがあります。さらに、県大世界あいち学の特徴としてあったのは、「県大世界あいち学」ですので、「世界」と同時に「あいち」つまり足元と繋がる、足元を学ぶことが世界に繋がっていくというコンセプトなので、近隣の企業の方々に来ていただいて、企業の方々に協力していただいて、大学に来ていただいて、お話をしてもらったり、特訓と言いますか、実習的なものやってもらったりしました。PBL型の授業と申し上げていいかなと思いますが、こういうものも、少し控え目だったので、これからもう少しそこを洗い出した上で、どのように発展していくかということを考えていきます。こういう形で継承していくことになりますので、そのようにご理解いただければと思います。

○ 委員

これは以前も伺ったのですけれども、新しいプロジェクトを次々打ち上げるというのは、華々しく注目を集めやすいものでもあります。しかし、既に評価されたものをさらに地道に発展させることは、大学の本来のあり方としては重要です。また、このPBL型の授業というのは、運用がなかなか難しい面があります。最初にアイデアを作って、形にすることは簡単なのですけれども、それから、学生が満足をして、刺激を受け、お願いをする講師の方々も手応えを感じるという形で継続させることの方が大変だなということを感じています。多様性や文理融合、インキュベーション、アントレプレナー、さらには前も申しましたが、

リスキリングにも関わってくるかと思います。こういった試みが、インキュベーションとしての機能を果たす新しい動きを生み出すものとして展開をすれば、素晴らしいなと考えております。また、愛知県の地域のニーズにもこたえるものにもなると思い、改めて伺いました。どうもご回答ありがとうございました。

他に御意見・御質問等ございませんでしょうか。

(意見・質問なし)

それでは、委員から出ました意見を参考にして、引き続き検討してください。

(4)愛知県公立大学法人の第三期中期目標期間の業務実績評価実施要領について

○ 委員

それでは、議題4「愛知県公立大学法人の第三期中期目標期間の業務実績評価実施要領について」に移ります。資料3について、事務局から説明をお願いします。

(資料説明)

○ 委員

ご説明ありがとうございました。それでは、説明のありました資料の内容につきまして、何かご意見はありますか。

○ 芸術大学

認証評価機関の評価を踏まえた評価をするということですが、芸術大学については今年度認証評価を受けておりまして、まだ結果が出ておりません。そうすると、その前の認証評価によるということでしょうか。県立大学は来年度受けますよね。

○ 県立大学

県立大学においては、来年度認証評価を受けます。

○ 愛知県

外部の認証評価機関の評価につきましては、県立大学が2018年度に実施しておりまして、芸術大学は今年度実施しておりますので、芸術大学は今年度の認証

評価の結果を踏まえて、来年度に第三期中期目標期間の評価をしていただくということになります。

○ 委員

他にご意見がないようでしたら、原案のとおり決しまして御異議ありませんか。

(異議なし)

愛知県公立大学法人の第三期中期目標期間の業務実績評価実施要領については、原案のとおり可決されました。

○ 委員

ありがとうございました。本日予定しておりました議事は以上でございますが、委員の皆様から他に発言はございますか。

○ 委員

それでは、私から少しよろしいでしょうか。

前回10月28日の評価委員会の後に、兵庫県の知事選挙が行われましたが、混乱が続いております。私はこれが公立退学のあり方に関しても大きな影響を持っていると考えています。

1990年代半ば以降、大学はその設置主体のいずれかにかかわらず、大変大きな変動にさらされてきました。ただその中でも、公立大学は、大きな変革というよりも、嵐の中にずっといると言ってもよいのではないかと思います。もう四半世紀前になりますが、当時の都知事が、都立大学に対してフランス語などを教える必要がないとか、ドイツ語の教員が多すぎるとか、8月は大学の教員は遊んでいるのだから給料払わなくてもいいとか、さらには学部学科の構成や人事等にまで意見を言い、大学の名前も変えて大混乱になるという事態が起きました。ただ、私が意外だったのは、それが知事選挙において、大きな問題にはならず、知事を辞任するまで高い支持を享受していたことでございます。その後、大阪で、公務員は甘やかされ過ぎていると主張して、各部局の統合等を主張する動きが強まりました。これは現在も続いております。その結果、府立大学と大阪市立大学の統合とか、そういったことも行われました。また、芸術関係の団体への補助金等は大幅に削減・中断をされるに至っております。名古屋においても、同様の動きが起きております。

これらの知事等の発言は、それなりに政治的な意見の表明でもあり、一概に

批判をしてよしとできるようなものではありませんが、兵庫県では、故意に捏造した情報が振りまかれて、自ら命を絶つ人が2人生まれるという事態にまで至っております。その中でも話題となった問題の一つが、兵庫県立大学の学費の無償化ということでございました。公立大学のあり方もこの混乱に無縁ではなかったということです。

無償化が進むことが問題なのではありませんが、このような中で政治課題になりますと、知事が変わることによる大学運営への意見や意向がさらに強まることが予想されます。特に受験生が限られており、多くの県民にとっては姿が見えにくい芸術大学に関しましては短絡的な政争の具とされる可能性が高まります。今回の兵庫県のようなことに鑑みますと、いつ、このようなことが、県立大学や芸術大学に起きても不思議ではないかなと、大変心配をしております。

今はそういう動きがございませぬし、幸いなことに、現在の知事、その前任の知事いずれも、公立大学のあり方に比較的理解のある方だったのではないかなと承知をしております。しかし、今後どういう動きがあるか分かりません。万が一このような根拠のない批判が起きた際には、県大世界あいち学のような地元根差した、地元の課題に応える、また地元の学生のニーズに対応するプログラムを充実されることは、先端研究だけではなく、すべての学生にフィードバックされる取組をしていると反論することができます。同様のことを、芸術大学もぜひ取り組んでいただきたいと思います。大変難しいことは承知をしておりますけれども、東京藝術大学とは違う、京都とも違う、愛知県立芸術大学だからこそ、こういったことができるのである。そういったことに、今後より力を入れていただければと存じております。

○ 大学法人

芸術大学については、逆に顔が見えていいると私は思いますが、県立大学については、なかなか外から見ると顔が見えていないと思います。やはり公立大学である以上、県の税金を使わせていただいているので、県立大学の存在意義をしっかりと意識しなければならないと思います。少子化により、私立大学の6割は定員割れをしています。そのなかで、県立大学として存在をアピールして顔を見せて、選ばれる大学になる。逆にそれができなければ、存在意義が問われても仕方ないと思います。今日色々説明しましたが、その底流にあるのはそういうことだと思います。そういう意味では、第四期はとても大事だと考えていて、顔が見えて、存在意義のある、選ばれる大学、そういう大学になるように進めていきたいと思っております。両学長とも今年の4月から新しくなりましたが、やる気をもってやっていただいているし、2大学の連携の動きもできつつあるので、このまま進めてい

きたいと思います。

○ 芸術大学

芸大については、少子化の波が来ており、特に音楽のクラシック人口が減少しております。これは少子化の部分と、習い事が増えている影響があります。昔だったら、ピアノを習わせようといった人が減ってきたというのが分かりやすいと思います。受験生の募集にしても、普通は高校生に働きかけるのですが、音楽の場合は、楽器によっては、3歳から始める子もたくさんいるので、そういった子供たちに働きかけようということで、「こども愛知芸大」という取組を今年度から実施しております。学生の募集については、他大学を研究して、情報整理してくれる方を配置しまして、芸大の広報しきれないぐらいあるイベントを、どう工夫して、県民の方々に知っていただくのかということ、学長直下の広報組織で実施する予定です。元々、学部広報委員会というのがあったのですが、その意見を吸い上げて、議論する全学の広報会議を設置して、進めようとしています。あと、国際化についてのご意見をいただきましたが、コロナ以降少し減っている部分があります。これは、お金がかかることでもあります。昨日、外の企業の方とお話したのですが、今後、コンソーシアムみたいな形で進めていく事業として実現しそうなものが、ニューヨークにあるインキュベーション施設と、京都大学と東京藝大と愛知芸大と、青木淳さんという日本で有名な建築事務所とコンソーシアムを作ってやっていこうということでした。そういったことを目玉にしながら、少しずつ進めていきたいと思っています。

○ 委員

第三期から広報についてはかなり色々なご意見が委員の皆様から出てきておりまして、どうしてもインパクトがないっていうのは、私もすごく感じております。ですので、今回この戦略的な広報の推進で、広報グランドデザインの策定をしていただけるということと、芸術大学の学長直下に広報組織を設置していただくということで、大変期待しております。ただ、現状においては、私立大学と比べると、まずホームページとか非常に固いと言いますか。特に若い学生さんで、アクセスする人というのは、限られてくるのかなと思っております。あと、以前も指摘がありました英語版のホームページについては、大分修正していただいているようです。他の大学等のトレンドを取り入れてもらうといいのかなと思います。インターネットという、こういう限られたエリアで外に発信するというのは、個々が頑張っても難しいものだと思いますので、ぜひその辺りも、グランドデザインの中の1つにウェブ関連の充実というものを考えていただきたいと思います。人材を投入する割合も、これからは真剣に考えていかなければいけ

ないと思います。どこに人を投入していったって、優秀な人をどこで把握するかというのも、それぞれ持った能力っていうのが潜在的なものはおありになるかもしれませんが、そこはしっかりと効率よく、人材を活用してもらえないかと思うので、よろしくお願いいたします。

○ 大学法人

私も私立大学のラインをいくつか登録しております。たくさん情報が入ってきますので、広報の仕方も色々勉強させていただいております。そういったものを参考にしながら、やっていきたいと思います。

○ 大学法人

やはり人と金をかけていかないといけませんが、予算的なものも限られております。メディアに記事を展開してもらわないといけませんが、彼らもネタがないと記事を書けない訳です。これは、先ほどしました第四期の話にも繋がって来るのですが、彼らが記事を書きたくなるようなネタをどれだけ提供できるかが重要になってきます。そのあたりを積極的にやっていきたいです。新聞社は投げ込みによる情報提供が多いですが、なかなか投げ込みでは期待できませんから、まずはメディアとの関係を築いて、そこから興味をひくようなネタを提供していく。そのことが、我々が第四期でやっていくことの見玉に繋がっていきます。そのような形でやっていきたいと思います。両学長ともメディアとの繋がりができてきています。県大学長は毎日新聞のコラムで書いてもらっているし、芸大学長は中日新聞で取り上げてもらっています。今度、芸大に来て講演してもらうのですが、そういったことは、これまでできておりませんでした。県大も芸大も長久手市にありますので、中日新聞の東尾張版にしか記事が掲載されません。もう少し広く載るような記事展開をしていただけるよう関係を持つようにやっていきたいと思います。

○ 県立大学

広報については、今お話が出たとおりで、先ほどご指摘をいただきましたが、皆がアクセスするようなホームページの構築も可能な限り力を進めたいと思います。大学がどういうことをやっているか、我々が提供できるのは、やはり学生がどういう活動をしているか、どういう学びをしているか、あるいは教員がどのような活動をしているかです。それがもう唯一であり、最大であるので、そういうことを、関係性の構築も含めてですが、やっていきたいと思います。地道ですが、まず県の人達に、そしてできれば、全国の人達にまで両大学の取組がどのようなものかというのを知ってもらう努力をしていきたいです。昨日も芸大学長

と一緒に取材を受けておりました。頑張ります。

○ 委員

先ほど、芸術大学における子どものためのプログラムの紹介がございました。そこで、ちょっと気になっていることがございます。世界最高のオーケストラの一つとされているベルリンフィルが子供のためのプログラムを始めたのが、25年ぐらい前だったかと思います。一方、名古屋フィルが子供のための音楽会を始めたのが4年ぐらい前だったかと思います。名古屋フィルはベルリンフィルよりも、鷹揚に構えていられるのだなと、感心をいたしました。本場のドイツでもそれぐらい危機感が強いにもかかわらず。一方、大学と音楽の関係はよく似ておりまして、支える志願者や愛好家はどんどんやせ細っておりますけれども、大学の数はこの30年間で100以上増え、オーケストラの数も増えている。それが限られたパイを奪い合っております。加えて芸術分野も多様化し、今では、小学校で音楽教室をやってくれることすら難しい。芸術大学は大学全体の基盤が弱まっているということに加えて、二重苦というところはあるかと思いますが、そういったことも承知した上で、是非とも様々な取組を進めていただければと存じます。特にご回答等をいただく必要はございません。意見としてお聞きいただければと思います。

○ 委員

アントレプレナーシップという言葉が両大学の説明資料にあるのですが、起業されるという方を支援するのは重要ですが、一方で新しいスタートアップと手を組みたいと思っている企業もすごく増えていて、そこからお金が流れてくるということもあろうかと思います。ただ、育てるだけではなくて、外部と積極的に交流をするよう進めていただけると良いかなと感じております。

○ 委員

やはりQSランキングの評価指標を見ますと、エンプロイアビリティの向上というのが非常に大きな指標となっております。今は、良い企業に就職できたということが、必ずしも大学の評価に結びつかないということもあります。起業されたということも、非常に価値のあることだと思いますが、そこを含めて多様な意味でのキャリア支援というのが重要になってきます。資料を読みましたが、キャリア支援については、一言触れてあるだけですが、大学を出た後にどのような道が開けるのかということ、数字だけではなくてイメージ戦略としてやっていくことが重要で、そういうところもアピールポイントになるのではないかなという気がします。現在、メディアだけではなくて、インスタグラムやスナッ

ブチャットなど、様々なものがあります。特に芸術大学となると、国内国外を問わず、人の心を掴むような、国際的な発信ができるポテンシャルとキャパシティをお持ちだと思います。そういうところを含めて、卒業後の未来が見えるような、若い方にとって魅力を打ち出していかれると良いかなと思います。海外の少し小さめの大学では、卒業生がどういう進路に進んだかという情報が、トップページの売りにしているようなところも多いです。この大学で何が学べるかももちろん大事なのですが、卒業した後についても、合わせてアピールするということも、日本の大学全体にとっても大事なことで感じています。

○ 芸術大学

今のご意見についてですが、芸大の場合は、企業に就職するようなデザイン科の学生は、企業のデザイナーになりたいですとか、企業に就職したいという学生は多くいます。ただ、ファインアートと呼ばれる、日本画とか油画とか彫刻の学生については、その数多くがあえて就職しません。あえて就職しない学生に対して、そのあとの生き方というのを、今まではどこの芸大も教えてきませんでした。つまり、トップアーティストとかトップ音楽家を養成して、何年かに1回すごい人が出たらすごいんだというようなところがありました。それではいけないということで、卒業後にどういうキャリアを積んでいけば、どういうやり方でアーティストになっていくのか。卒業して、いきなり成功できる学生は、ほんの一握りしかなくて、30歳ぐらいまで地道に活動して、やっと花開く感じが出てくる人が多いです。それまでの間に、どういうアピールをしていけばいいのか、いわゆる「芸術家になるにはどうしたらいいですか教育」というのを、やっていかないといけない。前から気が付いていたのですが、それをきちんと事業化していく。キャリア支援自体を教えるということも、取り組もうとしているのがここに書いてあることです。一方で音楽については、もっと残酷で、小さい頃からずっとバイオリンをやってきて、その地域でトップの子が入ってくるのですが、入ったら自分より遥かに上手い同級生がいたりすると、傷ついてしまう子もいます。でも、そういった子でも伴走や他の業界で生きていける方法というのを教えていくということに、これから取り組んでいこうと思っています。具体的な話で言いますと、先日CBCの会長とお会いした時に改めて頼まれたのですが、芸大から優秀なデザイナーが欲しいと言われました。会社の中に芸大を卒業した学生が欲しいという企業が増えているそうです。普通大学の考え方ではない学生が欲しいということだそうです、それがイノベーションを起こす起爆剤になって、会社の中でブレイクスルーをしていく人材になっていく。それがアントレプレナーシップのところを書いてある芸大の記述になっております。よろしくお願いいたします。

○ 県立大学

これは個人的に考えていることですが、私たちの大学は、芸術系とは違って、基本的に大学を卒業したら、就職をしていくことになります。就職率については、決して低くはないのですが、先ほどの県立大学がこれまで影が薄かったということとも関わりますが、良く言えば着実で、悪く言えば地味と言えます。そこにアントレプレナーシップと言ったときに、これを起業と直訳的に言ってしまうと、そういうシーズとかがない場合すぐにはできないです。だけれども、教育の部分で、アントレプレナーシップと言ったときには、例えば、チャレンジすることや失敗することも学びなのということも、教育の中に注入することによって、私なりの表現で言うと、もう少しぶっ飛んだような、チャレンジしていくような、世界にどんどん出ていくような、そういう願いを込めているところもあります。インキュベーション施設を作ってもらおうという関わりでいいますと、私たちの大学は、看護、情報科学が理系ということを言及しましたがけれども、他方で、人文社会もあり、文系・理系問わず、もう少し文系からも、外と手を結んで、企業や特定の地域の人達と繋がっていきけるような試みがあると良いかなと思います。卒業した後に戻ってくるという意味では、例えばですが、海外との繋がりというのは、1つの売りですけども、看護師という例を見ても、文化が異なる患者さんに物おじせず、どんどん自分の職務を遂行できるような看護師たち、あるいは福祉関係や教員、公務員だって同じです。工夫できる余地はいっぱいあると思います。先ほどの、QSランキングの話もそうですが、表にでるようなアピールの仕方と同時に、特徴や特殊性で、競争ではないような、いわゆる芸術系に近いような、そういうところをうまく引き出すための第四期になるようにしていきたいなと思っています。そういう意味で、アントレプレナーシップについては、教育の部分で、そしてインキュベーション施設となると、もちろん文理融合が大事ですので、そこで芽生えた研究シーズとなり、卒業した学生が戻ってきて、他と繋がることによってこれまでないものを見つけていってもらおう。そうすると大学の形も、これまで以上に鮮明になるかなというふうに思っています。

○ 芸術大学

まず状況として、国公立の芸術大学は、日本に5つしかありません。東京藝術大学と、金沢、京都、沖縄、愛知です。受験生はどう見ているかというと、結構棲み分けができております。うちの大学にも、北海道や九州から受けに来る学生もおりますが、それは芸術大学に何を求めているかというのを理解して受けに来ています。そういうところでは、周知もできているし、受験生の方も100%ではないけれども、理解してくれています。うちのモットーは、根源的な要素やプリ

ミティブなことを大事にしています。ただ、うちができていないこととしては、受験生と県民が必ずしも一致していないということです。受験生は広域に渡っていますが、県民はここだけなので、県民に対する周知は少し弱いところがあります。ただ、これをやるには、予算が少ないです。やはり私立大学から比べると、1桁や2桁違うような現実があります。ただそれを、学長を中心に、広報やブランドを大学全体として、周知しようとしています。その中には、我々が普通にやっているような、定期演奏会とか卒業制作展とかが、県民に対するオープンキャンパスとして、少しずつ機能しているということを実感として思います。

アントレプレナーシップについては、いわゆる起業家を育てるということで、それはやっていると思うのですが、もちろんデザイン専攻等の分野とよく似た動きになるのですけれども、いわゆる従来の芸術家というのは、既にアントレプレナーシップでした。なぜかと言うと、1人で起業して、どうやって社会にアプローチしていくかということを考えないといけないからです。それを開学から既に60年間やっております。それが新しいアントレプレナーシップという言葉に変わって、そのためのキャリア支援があるとしたら、我々は「アートキャリア支援」と言っておりますが、いわゆるプロの人たちと一緒にいる機会を、大学から与えていくというものです。美術だったら展覧会だったり、音楽だったら演奏会に学生を参加させるような場を大学が提供する。これはもう、昔からやっております。

だから、もう既にやっていることを、ピックアップして集めれば、大学の成果として、受験生や一般の人に見えるようにすることを、大学全体でやろうとしています。

○ 委員

先ほど芸大からご指摘がありましたが、卒業して10年後にどれだけ活躍できているか、これが問われるところであろうかと思えます。さらに申しますと、例えば油画を出た方が、画家にならなければいけないかと言うと、そういう訳ではないかと思えます。油画を出て、カメラマンとして名を馳せているということであれば、これは立派な芸大の成果と言えるでしょう。彫刻を出た方が、舞台美術として活躍していることもあると思えます。様々な方向性があるかと思えますが、どういう形であれ、美術科を出た学生が、10年後に美術家として、音楽科を出た学生が音楽に関わる方として活躍できるような形に、さらに力を入れていただきたく、よろしくお願いをいたしたいと思えます。

○ 委員

委員の皆様から他に発言はございますか。

(意見なし)

長時間にわたり、円滑な運営に御協力いただきましてありがとうございました。それでは、進行を事務局にお返しします。

○ 事務局

次回の評価委員会では、本日いただきました委員からの意見を踏まえて、第四期中期計画に関する意見を決定してまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。本日は、ありがとうございました。

以上

会議録署名人

会議録署名人